

ユニテ

UNITÉ

10



目 次

ロマン・ロランの言葉	1
断章——『魅せられたる魂』	山口三夫 2
『魅せられたる魂』を再読して	垣内永至 4
アンネットの生き方——セミナーの発表から	中村佐多子 20
ロラン＝マルヴィーダ往復書簡(6)	南大路振一訳 27
ユニテの広場	西村太一 41
友の会だより	42
あとがき	45
研究所図書目録(3)	(付)



日本・ロマン・ロランの友の会編

ロマン・ロランの言葉

「アランに」

わが親愛なるアラン、あなたは私のために二つの誇るべき文を書かれました。私の作品に関してあれ以上に雄々しいものが書かれたことはありません。われわれの生涯の謎めいた法則によって、あなたが言われるように、われわれの生活は互いにすぐ近くを通りすぎながら、結ばれることがなかったのです。しかし、その生涯は離れ切ってしまいはしなかったのです。森のなかの、樹木のカーテン——時どきは開かれましたが——を隔てて隣りあった二つの道を、われわれの生涯は同じ歩調で歩きました。われわれは年齢（あなたはお何歳ですか？）と性質をいくらか異にしている、同じ種族に属しています。私は声のアクセントと歩調と身振りを覚えています。われわれは1643年〔ルイ14世即位の年。〕以前——1910年以前（今世紀の初めの、この10年は強い世代の特徴を示しましたが、間もなく、多くの者は滅びました）の人間です。そうしたわけで、私を見かけたことも、聞いたことも稀れか、あるいは全くないにもかかわらず、もっとも親密だった人々の誰よりもよく、あなたは私を理解していられます。そして、最初の教語から、あなたは奥底まで見ていられることが私にはわかります。一つの作品を位置づけるために、あなたにとっては何行しか必要ではありません。いったい誰が、あなたのように、ジャン・クリストフ、コラ、リリュリの距離を——かの3日にわたる行進の距りを、通りすがりに、一筆で決定できたでしょうか？あなた以外の誰が、いったいそれに気づいたでしょうか？ また、いったい誰が、あなたのように、ジャン・クリストフの鍵盤にまっすぐに行ったでしょうか、そして、確かな手つきで、大多数の人々が何ひとつ読みとれなかった秘かな音楽を発する和音を鳴らしたでしょうか？あなたは4歩で目的に達しました。言葉は行為です。そして行為はすでに最初のまなざしのなかにありました。わが親愛なるアラン、私はあなたに感嘆いたします、そしてあなたの批評に誇りを覚えます。愛情をこめて、あなたにお礼を申し上げます。

宮本正清訳『どこから見ても美しい顔』から

断 章

——『魅せられたる魂』について——

山 口 三 夫

……わからないではないが、どうか判断を急がないでください。簡単に、『ジャン＝クリストフ』のほうが『魅せられたる魂』より文学作品としてすぐれている、といえるのかどうか？「文学作品」とは、「文学」とは、いったい何ものでしょう。

あなたが稀れな女子学生として、中学・高校時代に感銘したロマン・ロランゆえに仏文科に進んだとしても、こういった言い方は早すぎるとわたしは思うのです。なぜなら、何世代もが、とりわけわが国フランス文学界の専門家筋が、そんな判断を述べてきたからです。

もちろん、それには理由がないわけではない。そして、反面、あなたが戦後世代の多くの人たち、とくに女性たちのように、たとえば「女性解放」や「ウーマン・リブ」に短絡的に結びつけないのは、いいこと、というか、世代が一回りしたというか、それはそれとして大いに意味のあることです。

そしてわたしとしても、あなたがかつてアンネットについて書かれたお手紙を、けっして忘れていたわけではありません。

ただ、仏文学専攻ということに関連して言っておけば、今や「ロランの季節」でないことはもとより、ある有名タレント教授の仏文学史は、この作品『魅せられたる魂』について、「女性が描けていない」と宣言しているという事実です。わたしは何も申しません。

だからでしょうか、去年だったか、もう一昨年になるのか、「ロマン・ロラン原作」のテレビ・ドラマが、わたしの娘ではない山口百恵主演であり、なんと『スキャンダル』と題されていました。わたしは二度と見る気がしなかつたのですが、もとより「父なし子」を育てる女性の物語だったのでしょう。題名を別とすれば、それはそれでいいことです。しかし「文学」とは全然、関係ありません。

言い忘れましたが、日本のタレント教授だけのことでなく、フランスでも『魅せられたる魂』に言及したものはいまだに少なく、読みえてはいない博士論文的研究を別とすれば、見るべき研究もありません。わたしにとって「研究」はどうでもい

いにしろ、時を待たねばならないでしょう。

そしてわたしもまた、（また、ではなくわたし個人のことですが）、いまだにこの作品だけについて書く勇気を持ちえてはいません。わたしに決定的な意味をもったこの作品についてすらです。

たぶんご存知のある本に、この作品に決定づけられた時にまつわるヴィジョンを書いたことがあります。要するに「解放」感であり、あれが暗い青春のただなかに輝いたとしても、「文学が人間を解放する」ことの意味が、わたしにおいて重要であり、その意味を解くことが生涯の仕事だという予感をいただいたのです。

わたしはまだそれを解きえてはいません。「文学クソクラエ！」と心のなかで叫んできたこの15年、しかし、わたしはこんな「文学」の存在を否定するどころではありませんでした。しかし一方、この作品の「研究」を恐れたのは、わたしの弱さにほかならないでしょう。（違った時期に、違った仲間たちと何度も読み返し、話し合いもずいぶんしました。）

夜もふけてきたのを口実に、最後に一つだけ言うておきましょう。

あの作品を書いていた時期のロラン年譜を見るだけでいい！ そしてよく言われるように（とりわけ、かつてのソヴェトがそうでした）、『母と子』までとその後の落差。——しかし、後半しか認めないといった見解はわたしのものではなく、後半が「告知」しているのはたんに「社会主義社会」ではありません。（ある日本人がかつて、「リヴィエールという川はソヴェトという大洋に流れ込む」といったアホラシイことを書きましたが。）

だから、問題なのです。「魅惑」を一枚一枚はぎとっていくとしても、これはたんに「個人主義」→「社会主義」の問題ではありません！ そして、たんなる「女性解放」ですらないと申しませう。

ただ、あの1920年代末から1930年代にかけて、老ロランがたたかった内面の闘いが、そして社会的・政治的闘争が、この作品にも反映していることは、たしかです。時代そのものの姿も、ある時はナマにすら描かれていると言えるでしょう。そしてここに、この作品の「文学」が、その人間的意味づけの深さがあるのです。

この時代に、一つだけでいい、はるかインドの解放闘争の動きを追い、あのよう

に「インド通信」にまとめて、月々発表したということだけでも考えてみてください。(わたしなど、南アフリカの黒人英字紙「ポスト」をやっと予約購読したが、その主な記事を若い仲間知らせることもうまくいかず、サボってばかりいるのです。)

言いたいことはもっともつとあるが、今夜は諦めましょう。そうでなくても、わたしはいま「大腿骨大転子骨折」の回復期にあり、実に実に久しぶりに夜中まで起きてしまったからです。

ただ、わたしに言えることは、この作品については当分、いい「研究」は出ないだろうということです。だから、あなたの印象でもいい、エッセーでもいい、感想でもいい、心から、その時その時、全人間としてぶつかったものの報告をすることです。わたしはまだそれをなしえてはいません。……

『魅せられたる魂』を再読して

垣内 永至

〔I〕20 数年前に読んだ本をもう一度読み返す。確かに読んだという記憶はあるが、そこに何が書かれていたかとなると、もう定かでない。主人公の名前さえ忘れてしまっていた。

読書会にも参加したことの無い私が、この長編小説の感想文を書くということは、全く冒険もいいところで、作者並びに訳者が心血を注いだ作品に、私ごとき者が多少なりとも批判めいたことをしなければならぬことは、遠慮したい気持で一杯である。自分の、物の見方に対する浅薄さが随所に現われることだろうし、自分の拙い文章を人前にさらすことになるのは、全く怖いことである。徹底した駄文に終始するだろうことを、おことわりしておきたい。

〔II〕私のは、みすず書房が昭和 28 年に発行した、ロマン・ロラン文庫(一冊百円)

による。部分的に紛失していたので、その分は、岩波書店発行のもの（一冊二百円）で補充した。いずれも宮本正清先生の訳である。

この本を読んでいて、私は始終いらさせられたことは否定できない。なぜなら、私ももう四十歳台。通常の観念から言って、そうそう波乱を求める歳でもない。今日の企業は、われわれに数多くの訓練・教育の場を与えてくれ、企業秩序の範囲内にあつての惰性を打ち破るよう要求しているが、その根底は、企業の繁栄、ひいては従業員個人個人の昇進や給料の増加、生活の安定を目指している。それが良質の商品を産み出すベースとなり、社会への還元ともなる。

ところが本編の主人公、リヴィエール・アンネットの生涯は、波乱に富んだ時代背景があつたとはいえ、安定安全を全く求めず、常に前進、自分はおろか、息子や自分の身边的人達を革命・革新に駆りたててやまないのである。何たる相違。怖くて到底この女性についてゆけないという気がした。この場合、私ならこうする、あの場面なら私はこうすると、生活方針、処世が違ってきて、しかも対照的にならざるを得ず、つい批判めくことになり、いらさせられたという次第。

とは言え、今後、アンネットのような女性が各界に進出して来るだろうということ、試験官ベイビーまで予測したような文章にぶつかると、さすがに先を見通していると、舌を巻く。

【Ⅱ】 本小説の主人公、アンネット・リヴィエール、23歳、顔の造作・胸、その他何もかもががっちりした姿体の持主。科学に興味がある。父の急死後、父の手紙を整理していて、異母妹が居るのを知るところから、この小説は始まる。

父は建築技師。好男子でしかも社交界、官界ともに信望も厚く、相当なやり手で商売上手でもあつたようだ。その父も尿毒症で二日もたず、50そこそこであっけなく死んでしまう。父母の仲は悪く別居していたし、母も5年前に、数カ月の病院生活の後、亡くなっている。世間知らずのお嬢さんがたった一人残されて、苦難の道を歩むことになる。（伯母が居て台所仕事をしてくれていたが。）財産もあつたようだが、結果的にはこれも失う。ともあれ父が出資した花屋で異母妹（シルヴィ。

もう一人女の子が居たがシルヴィが 13 の時、亡くなっている。)は働いている。手紙では彼女ら母娘が、父をわがもの顔で扱っているのです、アンネットは嫉妬する。勇を決してシルヴィの家を訪ね、妹に好感を持ち自分と同居を勧めるところなど、アンネットの人の良さを伺うことができる。

シルヴィは、背丈こそアンネットと同じくらいだが、姿恰好は対照的で、胸はほっそり、顔も小さく、小さい鼻がそり返っている。性格の違いも次第に浮き彫りにされてくる。シルヴィの方は世間の動向に敏感で、抜け目ない。二人は同居はしなかったが、頻繁に行き来する。このあたり、女の子二人のおしゃべりが活き活きと描かれていて、著者が男性であることを忘れさせる。またどこの国でも女性はおしゃべりなものらしい。

〔Ⅳ〕シルヴィの転職・失業・病気などがあつたりした後、この姉妹がイタリーのテニスの選手テュリオをめぐる奪い合いを演じる。こうなると世たけたシルヴィに、アンネットは一歩及ばない。妹にさんざんな目に合わされ、苦汁を味わう。シルヴィとの口論の果て、夜、戸外に逃げ出し慟哭する。しかし彼女は悟りを開いて立上る。この辺が彼女の偉いところか。彼女はいかなる困難にも、いつもしっかりと立上る。日本流に言えば、ころんでもただでは起きないところがある。ところが結果は、シルヴィも姉を心配し、二人してテュリオ青年をそでにし、パリに帰ってしまう。

一人の男性を、はた目もはばからず奪い合い、憎しみ合いを演じながら、最後には血のつながりが勝ったことになるが、日本人同士ならどうだったかと、つい比較してしまう。まして昨今のように索漠とした雰囲気の中なら、刃傷沙汰にまで発展しかねない要素を持っていたと思う。それがアンネットの卓越した理性で乗切ることができた。人はだれしも、こういう痛手を負うと、もうそれっきりと考えがちであるが、ここでアンネットの人生を象徴するような言葉がシルヴィの口から出てくる。「お気の毒さまね可哀そうなアンネット！あんたはねあんたが愛するのを止めるのは、生きることを止めるときだわ！」

〔Ⅴ〕シルヴィはアンネットの援助を得て仕立屋の店を持つ。シルヴィの処世術

のうまさ、経営の確かさに加え、アンネットが積極的に友人を紹介したりで、店は次第に繁盛してゆく。

アンネットも社交界で成功し、男性に大もてである。別に媚びるわけでもないのだが、彼女の魅力がひとときわ光るためなのだろう。

特にその中であって、アンネットは自分の将来を托すべき二人の青年、マルセル・フランクとロジェ・ブリソオを知る。二人とも裕福な中産階級に属し、28歳から30歳ぐらいである。

ロジェ・ブリソオは非常に雄弁で、しゃべるために生れてきたような美男子である。家族も聡明な人達ばかりで、アンネットは巧妙に仕かけられて、婚約を余儀なくされるが、ここからもう一つ気乗りしない。この男の中味を察知してしまったからか。普通のコケットリーなだけの女なら、この結婚ばなしなら御の字だろうが、アンネットは一日延ばしに延ばし、容易に妥協しない。そして二人の破局。というよりはアンネットの一方的な婚約破棄の宣言である。好男子のブリソオもだらしないうほどに、泣きわめき、しおれてしまう。そしてアンネットの誘うま^{いざな}まに肉体交渉を持つ。

このあたり、夫婦が理由^{りゆう}あって別居し、女が子供を育てながら健気に生きている、或いは結婚したものの女性の才能の発揮を止めがたく、やむなく離婚した、或いは単に子種を得るために、強引に男を誘った、という数多い実話とはまた違っている。アンネットらは熱情のうちに結ばれたが、唐突に結ばれたのでもない。著者はちゃんと伏線を敷いていて、アンネットをして、強い者に抱かれ、弱い者に愛を与えたい、全身の血が乳となつてしまえばよいというような、本人にも気づいていなかった母性本能を満たしてくれるものに疼いていた。理性を超えて本能の導くまま子供を欲していたようである。

そしてたった一度の交渉で妊娠する。この妊娠を種に金をゆするでもなく、世の批判から逃げるでもなく、経済的負担をもはねのけて、子供と共に生きることを決意する。この小説の舞台は、日本で言えば明治時代末頃か。強い女性である。現実には自分の姉妹や娘がこんな事になったらどうであろうか。小説だとわかっているからある程度読み流しもできようが、自分の身のまわりに起ったとしたら正視できる

ものでない。

〔Ⅴ〕 男児の出産。マルクという。しかし私の読み落しか、子供の名前がなかなか現われてこないのだ。アンネット 26歳 の時と思われる。

父無し子を産んだために、世間の眼は冷たい。私も同情できない。本当に自分の心に忠実であるか、淫らであるかは本人のみが知っていることであって、他人からはなかなか伺い知れまい。世の一般常識に逆うならば、反撥を食らうのは当然である。友人にも冷たくあしらわれる。そういう仕打ちに会うことがわかっていても、彼女はのこのこ出かけたりする。普通の人はこちらで挫折感を味わい後悔するが、彼女は挑戦的である。

子供の病気、当時のバリを席卷していた流行病にマルクも犯される。必死の看病。子供の健康が回復するためには、「私」は何か犠牲を払わねばならないのではないのか。そういう予感がずばり当ててしまう。この小説を読んでいたわれわれもが心配していたように、彼女は無一文となる。

公證人グルニュー氏に財産の全てを委せていたのだが、よくある如く、彼が株に手を出して失敗、あげくに失踪してしまう。こう書けば簡単であるが、われわれ世俗の利益に固執する者にとってはこの傷は癒えるものではない。一家心中しかねない事態となる。

ブルゴーニュにある家、そして別荘も売払い借金にあてる。子供はシルヴィに預け、職探しにかけずりまわる。彼女のような科学に興味を持つ高学歴者をもってしても、口は無く、大学の一見進歩的に見えるところでも、父無し子を産んだことがことごとく足枷となり失敗する。

いささかの救いは、シルヴィの店が繁盛し、金銭的に気がねなく、子供を預けることができたことか。しかしマルクはシルヴィやお針子達にとりまかれ、ちやほやされることを体で覚え、母親を疎むようになる。

〔Ⅵ〕 シルヴィは店の繁栄を優先して考える。アンネットが理想家肌なら、シルヴィは現実派である。シルヴィは 26歳 で結婚する。夫はセルヴ・レオポルドという 35歳 のがっちりした醜男で、ある大裁縫店の裁断主任だった。自分の生活

や経営にどんな人間が必要か、それを弁え面相にこだわらず、結婚相手を選ぶことができたとしたら大したものである。

シルヴィはある年の10月に女兒を出産、オデットと名付けられた。この間、アンネットがシルヴィの主人レオポルドの悩み事を、何度か聞いてやっているうちに男がのぼせ、間違いを犯しそうになる。成人した男女がたった二人だけの場所では、どんな事が起こるか、アンネットの無知が男に衝動を起こさせたわけで、咎められても仕方あるまい。この事件が尾を引き、シルヴィとアンネットの仲違いまで発展する。アンネットはオデットをわが子のように可愛がるが、シルヴィはもはや好感を持たず、姉に再婚さえ勧める。

この2巻目の終りで、マルク7歳、アンネット 33歳 である。

〔Ⅶ〕 この二人の仲違いの間をとりもつのが、子にかすがいならぬ、可愛い姪オデットである。シルヴィとアンネットの仲違いも一応解消し、店はうまくいっていたし、10月の午後の平和な輝くような日であった。好事魔多し。この可愛い女の子を、著者は転落死で消してしまう。子供の死は、病死でも事故死でも、親にとって断腸の思いであろうが、よりによって墜落死させるとは。

シルヴィは神をののしる。アンネットも動転しながらも、マルクでなくて良かったと思う。著者の冷徹な眼が人の心理を見透す。こんな時にあっても、人は自分の利益保全を願うのだ。オデットの死後、父親と二人の女性とはその行動に顕著な違いを見せる。

マルクは病氣勝ちな子で、しかもちやほやされて育ち、その上母親は日中はそばに居てくれない。で、肉体的にも精神的にも不健康である。母親に敵意さえ抱く。これは後に母と子の劇的な結びつきを印象づけるための伏線であろうか。しかしマルクも徹底的にはぐれもせず、育ったようである。やはり芯に母親護りのたしかさがあったのか、それとも昔は子供が墜落しにくいような環境があったというべきか。今の時代にこのような親子関係だったらどんなであろうかと、慄然とするような間柄である。

〔Ⅸ〕 アンネットの生活は一向に安定しないし、女としてのピンチもある。

例えばリュット・ギヨン、彼女も生活費を得るがための競争相手である。アブサン酒におぼれた良人を養っていかねばならなかったから、彼女の方が生活はもっと悲惨だったかもしれない。ここでもアンネットは自分の方はなんとかなる式で、相手の方を助けようとする。彼女ら夫婦も相当に教養の高い人達であるが、女が教師になり、男が詩集の一冊でも出そうとする目的は、達成できず墮落してゆく。しかも不幸にも女の方が先に脳充血で死んでしまう。

或いはマルセル・フランク（アンネットがロジェ・ブリソオと共に自分の将来をかけていた人）との再会。

或いはフィリップ・ビヤール博士（けばけばしく有名な流行児の外科医）はノエミなる妻がありながら、アンネットをねらう。彼はアンネットと結ばれるなら妻と別れてもいいと思っている。アンネットもその気でいた。しかし結局ノエミの懇請に負け（発砲さわぎまで持ち上る）、強引な男の欲求から身を退ける。またまたここでも彼女は人の哀れに弱く、理性が働いてしまう。他人を苦しめてまで、自分の幸せをつかむことのできない人である。しかし他の人は、自分以外の人には非情になり得る。マルクはノエミに誘惑され、軽くあしらわれる。マルクは自殺を決意する。だが偶然にも、新生を決意した母の詩を発見、母の生きざまに感動、母子は精神的な絆をとり戻す。

〔Ⅹ〕 戦争が勃発する。年代からみて第一次世界大戦と思われる。他の本の記述によると、

「1914年7月に勃発した大戦争。オーストリア国皇太子および同妃が、セルビアの青年に暗殺されたことを直接原因とし、オーストリアとセルビアとの開戦に端を発し、前者に味方したドイツ・トルコ・ブルガリヤの同盟国軍と、後者を援けたイギリス・フランス・ロシア・イタリア・ベルギー・日本・アメリカ・中国・ルーマニアなどの連合国軍との間の戦争に拡大。最も頑強に戦ったドイツは、1918年11月に休戦。翌年ヴェルサイユ条約その他によって講和成立。戦争参加人員、同盟国側約2,400万、連合国側約4,300万」とある。

またこの戦争から本格的に、飛行機・戦車・毒ガスが用いられたという。だがテレビや映画などで見るベトナムの戦争・その他の近代戦争の物量と精巧な兵器とそのさまじさ。昔の戦争は、怖いながらもまだ愛嬌があったように思える。戦地に駆り出されない限りは、まだまだ命は保証されていたせいか、アンネット自身に戦慄するような恐怖感が沸いていない。今ならどうだろう。そうはゆくまい。非戦闘員といえども、命は無いものと思わねばなるまい。

また横道にそれるが、戦争は無くなるものだろうか。私の考えでは否である。増えすぎたある種の動物が、集団自殺するが如く、人間も何か狂気に操られ、人間が人間を間引いて、多少なりとも人口の増加をくいとめているような気がしてならない。第一次・第二次世界大戦のような大規模のものは無いかも知れぬが、局地戦争なら人類の生存する限り続くように思えてならない。第一番に抛り所にしたい宗教も、エゴイズムがあつて他民族の危機まで救い得ず、戦争のストッパーになり得ない。狂気は宗教の上を行く。

アンネットには生活の糧を得るための毎日が戦争であり、本物の戦争の勃発にもたじろがない。ドイツ軍が仏領に侵入を開始し、北仏から避難民が逃がれてくる。アンネットはアポリヌとアレクシスキェルシイ姉弟を助け部屋を貸す。ところが彼らはとんだ代物で、扶養を受けることを当然のように振舞い、居ついてしまう。

戦争は容赦なく家庭を乱し、破壊をもたらす。アンネットの住むアパートの住民からも数人の出征者を出し、シルヴィの主人も俘虜になって、ドイツの病院で死ぬ。シルヴィの激しい悔恨。

マルクは退学処分となり反戦活動に足を踏み入れる。

1915年10月、アンネットは地方の中学教師に赴任する。アンネットの正義感は地方に行っても遺憾なく発揮される。ドイツの俘虜がこの地方へ送り込まれてきたとき、群衆は血に飢えたように、ドイツ兵をいたぶろうとする。アンネットの怒声が群衆をたじろがせる。そしてドイツの負傷兵を介抱しているうちに、母性に目覚める。単に息子に対するのではなく人類全体に対する大いなる母性に。このあたり崇高なまでに美しく力強い。

この事件をきっかけに、この地方の名士ドマルイユ夫人の知遇を得、またまた非

常な冒険に乗り出すことになる。

ジェルマン・シャヴァンス、戦場で重傷を負う。ドマルイユ夫人の親類で、夫人の家で療養しているが余命幾許もない。アンネットの人物にふれ、彼はとんでもないことを頼む。ドイツ人でフランスに住みついでいて、強制隔離されている無二の親友、フランツに再会できるよう必死に訴える。アンネットは旧友をも動かし、手紙の仲介からついにフランツをスイスへ脱走させることに成功、二人の親友は再会する。（この二人の青年の名前がフランスの方がジェルマンで、ドイツ青年の方がフランツと、非常に象徴的である。）

その後は死者と生存者の差がはっきりする。死んでしまえばそれまでである。ジェルマンは死に、フランツは令嬢と恋し生を満喫する。これだけ世話になったアンネットをかえり見ることもない。私の読み違いか、アンネットはフランツを愛していたふしが見えないでもない。またこの事件は日本では考えにくい事である。周囲が外国に囲まれている国なればこそできることで、このあたりの経緯はなかなか理解しにくい。

〔Ⅺ〕 マルク 18 歳に。父の正体を知ろうとする。ロジェ・ブリソオは社会党代議士で、大臣を歴任、雄弁家で雷名を馳せている。（彼にも不幸はあった。一人娘が亡くなっていた。）マルクは父の演説を聴かんものと、一番近くに席をとる。しかし父の雄弁の中に空虚さを嗅ぎとる。

雄弁家、派手な人は私も好きでない。しかし 18 歳の人間が、聴衆が陶醉している名演説のさ中、人間の本質を見抜き得たとは驚きである。私の乏しい経験からしても、何人かのグループの長になることは、なまやさしいことではない。何らかの才能があったればこそである。まして一国を率いるとなると、単に雄弁であることや、金の力だけでなり得るものでない。ロジェ・ブリソオの立場がアンネットやマルクにとって良くないので、ちょっと気になった。マルクは父の血が自分の体内に流れていることを嫌悪し、かえって母の真実、偉大さを知ることになる。

〔Ⅻ〕 1918 年 11 月 11 日、戦争は終わった。人々は喜びと安堵にもどる。

アンネット母子にとって現実には厳しい。食わなければならない。マルクにとって

も、いつまでも親の口から餌をついばむわけにゆかない。アンネットはアンネット
で自尊心から、シルヴィの援助をなかなか受けようとしませんが、結局のところ、数
千フランの融通を受け、妹に自己満足を与えた。シルヴィはまたマルクをもあの手
この手で懐柔しようとする。

マルクやその友人達は、4月の第一日曜日の示威運動に参加する。ジョーレスを
暗殺した男の免訴を憤ってとあるが、こちらの勉強不足で必然性がわかりにくい。
デモ隊と警官隊とが衝突し、発砲・抜刀・大混乱となる。

アンネットはちょっとした勤め先で、ルーマニア人のある家庭と知り合いになり、
三人の娘とその父親で大地主であるフェルディナンに、非常に気に入られる。ブカ
レストへの所用に、家族共ども旅行に連れ出される。しかしこともあろうにこの三
人娘が、アンネットを父親の情婦にしようと画策するのだから啞然とする。普通の
女の子ときたら、父親と親しくする女性を警戒し、寄せつけないものだが、この場
合全く逆。あり得ることを描いているのか。アンネットはフェルディナンの追跡を
逃がれるため、氷の沼に飛込む。まさに命をかけて拒否したわけで、これでは男も
手出しできず、救助するのが精一杯だった。この時アンネット 45 歳。

アンネットはある新聞社の秘書兼タイピストとして、勤め口を得る。

ここにチモンという老次長が居て、これがまたすごい男で、社員には雷の如く恐
れられている。出生がいやしく、彼はそのことで世間に復しゅうしようとしている。
こういう主人でも、アンネットはひるまない。ここでもアンネットの信念と、教養
の高さがものを言っている。チモンは世間でも鮫とか山賊とか呼ばれ、評判が良く
ない。マルクさえも、母の好意を受取ろうとしない。チモンに仕えている母が汚ら
わしいというのだ。

ある夜、アンネットは大宴席に招かれるが、あろうことか、チモンは少女に犬を
けしかけ襲わせる。みんなも見ていた。先に休んでいたアンネットが止めにはいる。
犬は慣らされているので人に咬みつきはしないが、襲われる方はたまったものでな
い。地位も分別もあると思われる男が、こんな暴挙を平気でやるとは、恐れ入る。
ここでは一度しか現われてこないが、何度もやっていたと読み取れる。

この遊戯にしろ、アンネットを父の情婦にしようと、姉妹で力を合わせた人達に

しろ、われわれ日本人には、到底理解し得ないことをやらす人種である。かつての指導者を群衆の前に引きずり出し、リンチを加えとか、ナチの責任者を、何十年もしつこくつけまわし告訴するとか、牛を公衆の面前でいたぶって殺したりするとか、これみな肉食系の人種の仕業である。彼らはわれわれより、一桁上の執念と残虐さがある。

私の読んだ限りでは、日本の小説には、犬をけしかけて女性を襲わせ、見物するというのは登場しない。風俗・習慣の違いが出ている場面である。

アンネットはチモンの許を離れたか？いや会社はやめなかった。チモンの口説きに感動したからである。彼女の給与が上ったわけでもないが、チモンの尊敬は得たし、彼の人間性をも徐々に変えていった。しかしチモンを暗殺しようとする企てが何度も試みられ、アンネットも当然そういう危険に巻き込まれていたのである。

チモンとアンネットがイギリスに居る頃、マルクは病気で生死をさまよう。生来、頑健でないことと、栄養失調も手伝っていたのではないか。

チモンはアンネットを帰す。そしてこれが二人の永別となった。チモンが急死するからだが、死因は不明。ここの下りはこうだ。

……電報を読んだ。チモンシス。その言葉は読むか読まないうちに消えてしまった。それが彼女にとって何だろう？

とある。アンネットはチモンのそばから逃げようとしていたのではない。マルクの病状回復を見届け、イギリスに向け再び出発しようとしていた矢先の電報だったのだが、少なくとも文章上では、チモンの死は、アンネットに何の感傷も呼びおこさなかったようである。扱いがあまりにも冷たすぎはしないか。女性はその刹那刹那を、男性よりもより没頭して生きているといわれるが、好意的に解釈すれば、アンネットには、チモンとはいつ別れても悔いのない仕事への協力と、心の準備があったからか。それとも彼女の目前に、マルクとその恋人の一生にかかわる問題が、横たわっていたからか。

〔XII〕 マルクの友人シモンが殺人を犯し逮捕される。。シモンを弁護したのはもう一人の友人と、マルクだけである。マルクの律義・正義感・泥くささを身につ

けた青年像が浮び上る。不幸なことに、シモンは父親からも見放される。

シルヴィは健康上の衰えと、快樂から足を洗うため店を売却。そして養子を迎える。ベルナデットと、双生児のアンジュとコロンプの3人である。シルヴィは長女のベルナデットを後継ぎにしようと、それもマルクと結ばせようとするが失敗。これがもとでマルクは後にベルナデットから、手痛い復しゅうを受ける。

マルクは病気で倒れ、同じアパートに住む女性（アーシャ・ロシアよりの亡命者）に助けられる。アンネットにマルクの危機を知らせたのもアーシャである。彼女もまた、辛酸な生活をなめてきた。

八巻の始め、（マルクとアーシャが結ばれたあと）アンネットとアーシャの会話が愉快である。

といってもアーシャとマルクの生活は、恋愛だけでは生きてゆけない状態である。マルクはラジオ機械の販売と取り付けをする商店に勤め、アーシャはある出版業者のために、ロシア文の翻訳の仕事をする。

アーシャの妊娠。若い二人の愛情に早くもヒビがはいる。女が妊娠したことで考えがこうも変わるなら、男もいい面の皮である。彼女は荒波にもまれてきただけに言うことも強い。マルクに一人前の男になれという。先ずマルクに行動させ、それが気に入るか、いらぬかはそれはあとでいうと言う。

アーシャは、取ることもできず、さりとてあきらめることもできない、何も決めないのに一切の精力を費やしているマルクから、離れていった。こういう女性にかかると男女の肉体的な結びつきが、ほとんど意味をなさないことがよくわかる。平凡な女性にとって、終生の結びつきと思われる行為が、アーシャには何の役にも立たないとは。

アーシャはチャネリヅエ（コミンテルンの秘密の使命を帯びている男）の横柄さに抗いながらもひかれてゆく。チャネリヅエと比べればマルクはまだ子供で、アーシャはマルクとの対話を求めながらも、さまざまな行き違いがあつて思うようにならない。行く末は明白で、アーシャはチャネリヅエに犯かされる。

マルクもアーシャと離れてからは、だんだんと思想的に固まってき、行動の面でもそれが現われてくる。身を切るような思いで告発記事を、パンフレットにし出版するが、だれ一人読んでくれない。こんな折、コロンプ（シルヴィの養女）と結ばれ

ようとするが、マルクとの婚約失敗に恨みをもつベルナデット（既に結婚し裕福な生活をしている）に復しゅうを受ける。コロンプは投身自殺をはかり一命をとりとめたが、修道院へ身を転ずる。

このあたりのマルクはコロンプとの再会もならず、かわいそうであるが、いずれも自分で蒔いた種、それを刈りとることもできないおっちょこちょいである。暗闇とはいえ、自分の恋人を見誤る？なんて、信じられないような愚かしさ、また女の執念も恐ろしい。自殺をはからねばならないのはマルクの方だったのではないか。

〔XIV〕マルクとアーシャは再び劇的に結ばれる。それをお膳立したのは彼らの子供ヴァニヤとアンネットである。

マルクの左翼活動も本格化し、警官に殴打されることや、命をねらわれることも一再でない。

ここでまたシルヴィが登場する。彼女のかつての華やかだった社交ルートを通して、何とかマルクに危害が加わらぬよう手をまわす。彼のような闘士でも女性達の援護なしでは生きて行けない。

ジュリアン・ダヴィ（若かりし頃のアンネットの意中の人）は平凡な結婚をしていて、ジョルジュという娘まである。20年、30年を経ても結局彼はアンネットによって人間形成させられていたというのだ。彼の娘さえもアンネットを知っており、アンネットに憧れる。

かつて別れた母や恋人が、自分の行方にキラキラと輝き、しかも幾年経ようとその星は輝きを失わず（その星自体に生命力があり、前進と昇華を止めないためだろう）道しるべとなる。二人は再会したが、アンネットはその魅力を失っていない。私達の平凡な人間の交際範囲では、昔の恋人を甘ずっぱく思い出すことはあっても、何十年後にご対面となると、女性の方が気おくれするのではないか。

著者はインテリの行動力の無さを戒しめる。ジュリアンとブルノーの二人を例にとり、マルクの眼から見て批判させている。第二次世界大戦後、日本においてもようやく気づき、行動するインテリが求められ、事実そうした人達が多く出ていることは歓迎すべきことである。

しかし考えてもいない、行動もしていないわれわれはどうなる？人間ではない？苦しい問い詰めだけでもはやそれに答える勇氣もない。仕事に没頭する以外に能のない男である。家族を路頭に迷わすわけにはゆかない。結局のところ、マルクやアンネットの行動力を賞讃しながらも、彼らについて行けなくなってしまうのは、生活の基盤が全然違っているからだ。

〔XV〕マルクはジュリアン・ダヴィヤブルノーの支持を受けて大衆に知られるようになり、身の危険も一層つものようになる。そしてある演説会でとうとう乱闘騒ぎとなる。この後気分転換に彼ら家族はイタリー旅行に出かける。もっとも信頼に充ちた、もっとも親しみ深い日々を過ごす。

彼ら親子が散歩中、老人と子供を襲った暴漢共を止めようと割込んだマルクは、一撃のもとに殺される。

どこの国においても、子が親よりも先に死ぬことは親の不幸ではなからうか。アンネットはわが子の非業の死を罵ったりはしていない。この死別に先立ち、親子はその立場が逆転したような関係で描写されているところがあるが、マルクの精神的成長が親と子の年齢差を超えた結びつきとなっていただけに、アンネットの落胆は察して余りがある。

マルクの正義感を笑うことはできないけれども、一瞬の不正を見て飛込んだばかりに、彼は死ぬ。彼は即死だから苦しまなかったかもしれないが、母・妻子を残し悲嘆に落し入れてしまった。彼にはもっと大きな目標があったはず。それに老人と子供はなぜ襲われたのか、襲われるだけの重要な人物だったのか描れておらず、（またそれほどの人物なら、マルクともども老人も殺されていていいはず）余計無駄な死に思えてならない。現実におわれわれがこういう場面に出くわすと、足がすくんでしまってどうにもならなかったろう。殊に最近の世相で、何を隠し持ち、何をしでかすかわからない連中に、あなたは敢然と向って行くことができるだろうか。大多数の人が否であろう。またどちらが正しいとも決めつけられない性質のものだろうか。やはりマルクはマルクの道を歩んだと言うべきか。

〔XVI〕この本では資本主義が徹底的に糾弾されているように思われる。

戦争、商業、海賊は

三にして一、同体なり

この三位一体は「資本主義」という名をもっているという。それを破壊するか、それともそれを受け容れるかより他に選ぶ道はないともいう。またそれに対抗すべく労働大衆の団結を説く。騒ぐばかりが能じゃないぞと忠告する。なぜなら労働大衆には多くの不統一の要素があって、同じ社会主義原理を主張する諸党派間の不倶戴天の不和、原典の解釈と策略の相違を互いに対立させて罵り合うことが敵の乗ずるところであると警告する。このあたり、本文をもっともっと引用したいところで、資本主義と革新勢力への痛烈な批判と叱責が続く。しかしこういう文面にぶち当たると、われわれはもはや身の置きどころが無くなってしまふのだ。正邪はともかく、われわれは正しく資本主義社会のまっただ中に身を置き、生活の糧を得ているわけで、自分の生活を打ち捨てない限り、資本主義社会を真向から非難することは許されない。この本に心酔しようと思えば自分の生活の基盤がゆらぐことを覚悟しなければならぬ。そういう危険が潜んでいる。他の読者はこのあたりをどう読み取るであろうか。

ただ著者は、資本主義に対抗するものとして、共産主義を挙げるのではなく、「労働主義」なるものを挙げる。信仰も文化も、社会状態も「労働」という確乎不動の基礎の上に、根底から建て直さるべきだという。

マルクはこれに目覚め、その礎石たらんとして意志半ばで死ぬが、アンネットやアーシャが引継ぐ。

「一人の人間の死は地球そのものには何の変化も起さない。しかし人間の生活は変わる。アーシャはヴァニャをアンネットの許において、アメリカ人と再婚し二児をもうける。そして再度未亡人に。

マルクの死が及ぼした影響は、アンネットよりもシルヴィに大きかったとある。アーシャがマルクの死後一年も経ずして再婚を考えた時も、シルヴィは反対し（これが通常の人間の考えだろう）アンネットは賛成する。30にも満たない人間は真直に進めという。マルクが今いる世界では、アーシャを所有する権利はないといい切る。

天晴れと言う他ないけなげさである。けなげさという言葉では弱い。ともか

くすさまじいまでに人間の行動力・生命力を是認した表現である。この10巻目の23ページから28ページにかけての、アンネットとアーシャ、アンネットとシルヴィの会話をそのまま再現したいほどに見事である。

〔XVI〕シルヴィがあっけなく死ぬ。

アンネットも慢性の腎臓病が悪化し人生の終焉を迎える。臨終の場にあつて、彼女はいろんなことを知覚する。自分が唆したわけでもないのに、彼女の熱情に巻き込まれ、彼女のまわりの人達が革命の犠牲となる。マルク・シルヴィオ・アーシャ。更にはその子供達も犠牲になる可能性のあることがわかる。夢うつつの中にあつても、彼女は革命への前進をやめない。彼女の生、彼女の体、彼女の軌跡そのものが革命だったのだ。

アンネット・リヴィエール。このリヴィエールは川を意味し、名は体を表わすように、彼女の川は一つの大きな流れとなり、海にでなく、険しい山腹をよじ登り、空の大洋へと溶け込んでしまう。

この終章にあつても、まだ出来事はあつた。マルクが憎むべき女、ベルナデットに生ませた子、マルセルとの対面、アンネットの死の場にあつてのアーシャの心の迷い、シルヴィオの死、等々。

9巻目あたりだったか、突然に「私」なる人物が文章に現われる。これは著者自身のことであろうか。「私」はマルクやアンネットとも話をする場面がある。これを額面通り受取れば、アンネットのモデルが居たことになるが。ともあれ、なぜ「私」を登場させたのか、私には意味がよくわからない。

〔XVII〕駄文を長々と綴ってしまい、汗顔の至り。読書会にもついで参加したのではない者が、この大河小説の中味をどれだけ読み取れたか。他の人と意見交換すれば自分の至らなさがわかり、もう少し掘り下げられたかもしれぬが、自分一人ではこの程度が実力相応で、誠に恥ずかしい限り。

この駄文も読む人に少しでも理解していただくために、煩雑かと思つたが、筋を追いながら感想を入れるスタイルとならざるを得なかつた。そうでないと、これだ

けの長編小説ともなると、著者が訳者でない限り、一度読んだだけでは、この巻にはこういう事が書いてあった、ここはこうだった、などと思い出していただけないのではないかと、いらざる心配をしたためである。

登場する人物の中で重要とは思いつつながら、どう書いていいのかわからない人も出てきた。ピタン老(歳はまだ40そこそこ)とブルノー氏である。

また名前が出てくる人物については、全て簡単なメモをつけた一覧表を作成してみようかと考えたりしたが、微力で果せなかった。

そのメモの取り方も、大いに反省させられた。どこの部分から抜書きしたのか、必ずページ数をうつべきだったと。こんな事を書いて、また皆さんから笑われそうそのメモによれば、自分はたしかにその時点で共鳴し、或いは反発したのだが、その部分をもう一度念を入れて読返そうとするが、目指す箇所になかなか行き当たらない。私如き凡人は後で気がつく。

外国文学を読むことはむづかしい。文中に引用される歴史的人物や、その国の人達にとっては周知の事実でも、われわれにとっては皆目わからぬ事もあるからだ。ここでも勉強不足が露呈する。

最後に、私に長時間の余裕をもって勉強の場を与えて下さった、宮本先生や編集者の皆さんに、心から感謝いたします。

アンネットの生き方

—セミナーの発表から—

中村佐多子

1912年にロマン・ロランが『ジャン・クリストフ』を書き終えた時、すでに頭の中には「魅せられたる魂」の構想があったのであるが、実際に書き始められたのは1921年5月末にパリを去り、スイスのヴィルヌーヴに移り住んでからで、それ

までの間には9年という歳月が横たわっている。何故かと云うと肩のこる『ジャン・クリストフ』を書き上げたあと先づ息抜きの様にロランの作としては珍らしく軽快な「コラ・ブルニョン」が執筆されたからで、このあとも『リリュリ』『戦いを超えて』『先駆者達』『ピエールとリュース』『クレランボー』等を彼は次々発刊している。というのもその間世界情勢はいよいよ底知れぬ陰悪さを増して人々の上にのしかかり、遂に1914年には第一次大戦勃発をみたからである。その後書き始められた『魅せられたる魂』もこうした時代的背景を抜きにしては勿論書かれなかった。

やがてヒットラーが、ナチス党首となり、ムッソリーニ内閣が作られてファシズムは日に日に盛んになって行き、一方ロシア革命が起りソヴィエト社会主義共和国連邦が成立し、中国共産党が創立されて世界の動きは一步一步、第二次世界大戦へと必然的な歩みを進めていった。

ロランは『魅せられたる魂』を書き続ける事を幾度も中断して『花の復活祭』『愛と死との戯れ』、数々のフランス革命劇、又『ヨーロッパ自己を広くせよ、しからずんば死すべし』『過去への訣別』等を書き、傍らネール、タゴール、ガンジーの訪問を受け、『マハトマ・ガンジー』を執筆し、更に『ラーマクリシュナの生涯』『ヴィヴェーカナダの生涯と世界的福音』又インドとの間にかわされた書簡集等の著作をしている。これらはロランがソ連とインドの思想の両方にどれ程深い関心を持っていたかを示すものである。『魅せられたる魂』の中で彼は「私はこの時代にインドとソ連の社会運動の二つの主要な経験を検討していた。私はこの兩者のいずれにも感嘆していた。彼らを知った最初の日から、私はソ連とガンジーを彼らの敵に対して擁護した。ところが歴史的宿命は彼らをして互に敵たらしめた。そして私はマルクと同じ様に力のかぎりをつくして両国の絆となろうと欲し、また来るべき幾世紀に渡って世界の進行を粉碎しようとする、政治的反動、帝国主義的資本主義及びファシズムの巨大な力に対する自由なる精神と無産者組織の二大革命の共同戦線を張りたいと望んだのであった。」そしてガンジーのインドの非暴力と組織暴力革命との相反する二つの原理の間に外部に調和を作り出す機会をうるためには先づ、その調和を己の内部につくることだとかいている。

そこでその魂の葛藤をそのまま作中のマルクに代弁させる事になる。最初は第一次大戦をそのまま受入れたアンネットも、やがて戦争がかぶっている仮面の下を見抜き、戦争犠牲者、死の瀬戸際にあるジェルマンとの友情により、そして彼がアンネットに残した言葉により、いよいよ「戦いに反対する戦い」に身を投じ行動へとふみ切っていくのである。ロランの戦争拒否の考え方は「母と子」の章をとおしてつづきに述べられている。

又ソ連からの亡命者でマルクの妻であるアーシャにはソ連を代表させ、マルクと共に1900年代の人達をあらわし、ロランの思想から行動への過程をのべている。アンネット・リヴィエールは、ジャン・クリストフが1860年頃から1914年頃迄生きていたのに対し、1875年から第一次大戦を経て1930年頃までの世代をあらわす女性で、女性解放の先駆者であり今までの様に男性を介してではなく、直接現実社会にかかわりを持ち自分のパンは自分でかせぎつつ、この複雑で圧迫された世界情勢、社会情勢の中をいかに強く生き抜きいかにして自己を確立して行くかを彼女をして語らせている。とはいうもののこれはロランがみたまの女性を書いたというのではなく、こうあって欲しい或いはこれからの女性はこうあるべきだという理想の女性をかいたという面も多分にあるものと思われる。ここでロランと実際に深い関係を持った現実の女性達について一言加えておく事も、彼の豊かな女性観、又女性心理の巧みな表現を理解する上でよい手がかりとなる事と思う。ロランの生涯にもっとも多く影響を与えたとと思われる女性はやはり、母アントワネット・マリと、マルヴィーダ・フォン・マイゼンブークである。この二人にロランは敬虔な愛と深い感謝の念を持っていた。彼がキリスト教の神信仰を失うとして悩んでいた時、又病床に臥っていた時、母の無条件で献身的な愛はどれだけ彼を慰めはげました事であろう。又彼等はどんな時も音楽を通じて姉弟の様に結ばれていた。母に当てた手紙は非常に多く『ローマの春』や『ファルネーゼ宮に帰る』等の書簡集となって残っている。母とロランのこうした愛は『ジャン・クリストフ』ではクリストフとその母ルイザ、『魅せられたる魂』ではアンネットとマルクの愛情となって表現されていると思う。

マルヴィーダは西ドイツのカッセルで生まれたフランス新教徒の子孫で、ロラン

がローマ留学中らちょうどその頃彼女もローマに住んでいた為モノー教授に紹介されたのであった。彼女は当時 73 才で、ニーチェ、マッサーニ、又ロシアの革命家ゲルツェンやワーグナー等を友人に持っていた。ロランはその時 24 才であったが年齢の差は彼等の美しい友情の障碍とは成り得なかった。やはり音楽によりその他の知的交渉によりこの友情はロランにとってきわめて実り多いものであった。後に彼はマルヴィーダの事を第二の母とさえ呼んでいる。その他このマルヴィーダ家で知りあいになったソフィアとの愛情も忘れてはならないし、結局は破綻に終わったクロチルドとの結婚生活の体験は結婚や家庭生活についていろいろの事をロランに教え考えさせた事であろうからこうした事も原因となって新しい女性の生き方が問題とされたとしても不思議ではない様に思われる。

さてアンネットの創造活動であるが「一つの生の出来事の物語りをいくつも書くが、それは間違いで本当の生は内部の生である」と文中に有り又「この内部生命は『ジャン・クリストフ』のそれとは違って」とある様に、クリストフの場合は音楽という創作活動によって内的な情熱が外部に発散される機会があるのであるが、アンネットの場合はそうした具体的な手段がないので（詩があるがこんな事はほんとに例外である）その創造のエネルギーは人を愛するという方法で外部即ち実生活の上に現われてくるのだと思う。

しかも「秩序と制御をあたえる精神の知的創造による不断の発散をもって、情熱の奔溢を脱却することの出来ないこの女性は激しい意識の襲撃に身をまかせることが多かった」と書いてある。正と邪の限界を知らないこのはげしい力はあるにふれ出して、時にはロジェ・ブリソーやフィリップ又チモンとの場合の様に選ぶ対象をあやまる事もあるにはあるが、作中に書かれている様に先づ父親に対する愛、妹シルヴィに、そして子供のマルク、負傷したドイツ人の俘虜と次々に愛し、その愛は追々個人的なものから世界的、全人的なものへと広がって行く。即ち彼女の生活は外部の現実生活と精神的内部生命の世界との二重構造になっていて、この内部的な不断に創造し更新する生命力は彼女自身どうしようもないもので、彼女が彼女であるゆえんであり、運命であり、彼女の生命の源である。

ところで著者は「愛が執着する対象のおのおのは幻である」とかいているが現実

の世界が幻といっても単なる無ではなく、この二つは互にかかわりあってこそ一つの個体の人生も歴史も構成されるものであると思う。何故なら外部世界も又内部世界が形を変えて現われているだけであって、云わば同一物の二面であると思うからである。私はここでインド思想のマーヤーと云う言葉を思い出さずにはおられない。マーヤーとは一口に云うと幻影で絶対に対する相対世界即ち現実の世界を現わしている。それはこう云う。「幻影の中に実在があると悟れ」又、「一つのものが他のものと相違するのは名称と形式による。名称と形式だけが相違を引き起す。実在としては同一である」と。こうした考え方は一元論であり、汎神的と思われるが、ロランの云う内部生命、創造するエネルギー、愛、及び、自然、神、又実在に対する考え方にも同様のものがみられる。そこで『魅せられたる魂』の神秘的な面を理解する上でロランのこうした考え方がどうして生れて来たかを先ず知っておく必要があると思う。

簡単にはあるがその点にふれると、それはロラン自身の宗教的体験といえるもので彼は幼少の頃からそうした傾向の強い少年ではあったが、もっとも代表されるものは三つの閃光といわれるものでそれは彼の著作、『内面の旅路』の中におさめられている。この中でロランは先ずアンネットの場合と同じく自分自身がいつも並行的な二つの生を生きて来た事、その一つは実在の生である事、そしてそれからの噴き上げが三つの閃光という啓示体験となって彼をうった事、を詳しく述べている。三つの啓示の第一はフェルネーの見晴し台で、彼はほんの瞬間の出来事であったが「私は自然の裸体を見、そして知った」といい、二番目はスピノザの燃える言葉、第三はトンネルの暗闇の中でのトルストイ的な閃光となっていて、ロランはこれらの体験を通して「作り為す自然と作られたる自然とは同一のものである」「存在する一切のものは神の中に存在する」そして「私も又神の中に在る」という事を自覚した。

それ故、第三の場合トンネルの中で列車が事故を起して止った時も「呑！僕は囚われにはならない。無数の形に千變万化するプロテーである僕は空気よりもっと流動的に僕を囚える指の間から迂り出る。僕は脱出する——板や曲った古鉄や砕けた肉体系、トンネルの石の天井をつき抜けて脱出する。僕はここやかしこに存在する。到るところに存在する。そして僕は一切のものだ」という考えに彼は到達したのであった。

ちなみにスピノザであるが彼は物心の二者はもともと相独立せる実体ではなくて一実体の二属性に過ぎない。実体は唯一でそして無限である。それであるから原因を有していない。しかも一切事物の原因であるからこれを神と名づけるという一元的世界観を持つ實在論者で汎神論的な考え方をしている。

ロランは信仰を失うのも又神の恩寵の現われだと云っているが、キリスト教的な教会宗教への信仰を失い、一切が無意味に思われ虚無の底にふれて以来、いかにしてこの闇を克服して新しい生きた神を見出すかという事は彼の命がけの課題であったと思う。そして今、この三つの閃光こそ正に神の死と復活の根本体験でこれを人々に伝えんと云う事は芸術家としての彼の使命であり、運命ではなかったかと思う。以上の様に考えてくると内部の川の流れについてのロランの叙述がよく理解されるのではないかと思う。

話は元へもどるが、アンネットがロジェ・ブリソーとの場合は勿論の事、その後もジュリアン、フィリップ、マルセル……という様にそれぞれに個性のある愛の対象に出あうにかかわらず常に自己の魂の自由を取って置くのは一体誰の為に、何の為にと思われるがそれはロランの言葉をかりると、「隠れたる真理、彼女さえ分らない或る高いものの為に」で悦びにも苦しみにも豊かな真摯な長い一生がムードンの森に終ろうとする時、自分の生涯の苦しみは新しい未来世界を創造する為の生みの苦しみであって、自分はその過渡期に生れ合わせ彼女を支配するより高いものの為に自分の運命が利用された事をさとして満足する。今や彼女の個は失われ始めも終りもない無限、全存在の中に吸収されて行く。ロランは云う「苦しむ事は学ぶ事」これは「矛盾をも免れない、過ちも多い、又、真理に到達出来ないならば私達の窮極の真理である精神の調和に達しようと常に努力する生涯の内心の物語りである。」と。

ここには決して論題^{テーマ}とか理論^{リョリ}とかを求められないように。そこにただ、一つの生——真^{マコト}摯^しな、長い、悦びや悲しみに豊かな、矛盾もまぬがれない、あやまちにも豊かな、しかも、もし「真理」に達しえないにしても、私たちの最高の真理である、精神の調和に達しようと常に努力するところの生の内面の歴史を見られたい。

(『魅せられたる魂』第一版序から)

— 出 会 い —

住 谷 悦 治

ロマン・ロランは私の人生への輝かしい導きの巨火である。……私はロランの芸術のうちに、人類愛や人間の高さや深さを見る。『魅せられたる魂』の中に出てくるシルヴィとアンネット、とくにアンネットの一生に、私は人生最高の女性の姿をみるのみでなく、人間の高さや深さ、人類愛、そしてロマン・ロランの人間的高さや深さを見る。一女性の姿ではあるけれど、私にたいするアンネットの魅力は、女性であると同時に人生における人間としての魅力である。

失意のとき、悲痛に沈むとき、人間の離合に心痛むとき、貧困に、疾病に、何んとも途方に暮れるとき、アンネットを想えば、が然として新鮮な生気と、勃々たる勇気が心の底に湧きあがるのを覚える。それは単なる「小説」を超えた人間の魂の力である。

……『魅せられたる魂』を読む以前の私と、読んだ後の私とは、私の「生」の意味が転調していることは事実である。おそらく、私の「死」の意味も転調するに違いない。私はロマン・ロランの次ぎの深い言葉をいつも心に繰返している。

生の意味が転調するとき、死の意味もまた転調する。

死を規定するものは生である。

かくて生は死の彫刻である。

(ロマン・ロラン)

— 『私のジャーナリズム』(積慶園刊)から —

マルヴィーダとロランの往復書簡（6）

I マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年4月8日、水曜日の朝

（―――）昨日あなたは立腹し、不機嫌の様子でした。何だったのですか？私のせいではないでしょうね。私たちの水曜日と金曜日と日曜日がこんなに長くやって来ないのは、実をいうと、いささか辛いです。しかしご家族を晩にひとり残しておきなさい、など要求することは私にはできません。おそらく、あなたが二度目の朝食をしたあと宿舎にもどるまでに、ほんの少し暇なことも時にはあるでしょう。私のほうは今では2時以前に出かけることを控えています。——ああ、残された時間はほんの僅かです。しかし私はファウストと共に、これまでずっと繰り返してきた、あの古い折返し（折返し）の文句を自分のために唱えます——

「無くて我慢するのだ！ 我慢するのだ、無くて！」¹⁾
これが現世の人間の定めです。

ではお元気で。心からあなたを愛します。

M.

注

1) 『ファウスト』第1部、第1549行（「書齋の場」）。

Ⅱ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1891年4月8日、水曜日

(―――) 私はほんとうに不愉快な人間にちがいません。あなたが私をみて、立腹しているとか、不機嫌だとか、怒りっぽいや、文句が多いとかおっしゃるのは、これが初めてではないのですから。私は全然そんなことはありません——少なくとも、あなたがそういつて私を非難なさるその瞬間には。(それ以外の時は保証の限りではありません。) ただ時折、シロッコ¹⁾のために疲れ、ぐったりし、いらいらするのです。昨日もそうでした。頭が痛く、元気がなかったのです。口を利くことでさえ疲れる瞬間があります。(―――)

私は(確信はないのですが) ヴィラ・マッテイ²⁾ で仕事をしたい——仕事ができるかどうか試してみたいと思います。しかしそこで私がただ夢想にふけることもあります。心からあなたを愛します。

R. ロラン

注

- 1) サハラ砂漠から地中海を渡って吹き寄せる南風。
- 2) 『ユニテ』 2, P 10 の注 1) 参照。

Ⅲ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年4月16日、木曜日

したい友、今あなたも私の理想主義^{イデオロギア}を非難しはじめますが、私はあなたに断言できます——私があなたのために考えていることは、現実的な問題の解決以外には

ほとんどない、と。そしてこれまでのところ、実行に移ることを可能にする強固な基盤を見つけた唯一の人間は私です。しかし実行に移らねばなりません。今朝が考えたことなのですが、『パルヨーン』¹⁾が目下のところあなたにとって情熱的すぎるというのなら、『モーツァルト』を仕上げることは出来ないでしょうか。これは快い鎮静的手段であると同時に、私たちのほうでもあなたのために道を拓くよう積極的に努力できるでしょう。それはともかく、これからも、あなたのベートーヴェン研究に役立つものは——あなたがドイツ語のテキストであり苦勞しなくてすむように——すべて用意しておくことを心掛けます。(一一)

もしあなたが私のもっとも深い内面の生涯(それは誰にも話すことはないでしょう)を知ることがあれば、けっきょく私は人びとが想像するほど現実ばなれしていないことが分かるでしょう。もちろん輝かしい外面的な成功を収めたわけではありません。それというも、一つには、時代の悪い趣味に譲歩することを潔しとしなかったからであり、また一つには、他人が私の不利になるように使った(私はそのことに気づいていました)、つまり手段を私のほうでは嫌ったからです。しかし私が無駄に生きたのではありません。つい先日もドイツ最北からやって来た、それまで名前を聞いたことのない或る立派な婦人が言いました、「一個の人格になる勇氣、善をなすべく努力する勇氣をお与え下さったあなたにやっとお目にかかれたこの瞬間が、私にとって何を意味するかをお分かりいただけたなら……」と。私がこのことを話すのは虚栄心からではありません。そうではなくて、私の理想主義が——私自身は知らないのに——現実的な結果を生んだ証拠としてです。

昨日あなたは憂うつで無口でした。それに私が——まったく不本意にも——そのことの原因をふやしてしまったので(あなたにはいつも親切をつくすことだけ考えているというのに!)、私は、あなたが私にたいし怒っているのかと尋ねました。するとあなたは、私が自分で自分を責める理由でもあるのかと問い返しました。いいえ、したしい友よ、私はあなたについて自分を責めるものは何もありません。ただ一つだけ、私が自分を責めたことがありますが、それを後悔はしていません。そのおかげで私ははっきり見ることを教えられ、そのような問題ではあなたに幻想をいだくことを止めたからです。

したしい友よ、今晚はあなたとこんなお話をできないと思いますので、こうして

手紙にしておきます。あなたへの私の愛がたとえ理想的であるにしても、私はあなたにとって現実的な助けになるものを忘れてはいないのです。

M. M.

注

- 1) 『ユニテ』9, P, 14の注1)参照。

Ⅳ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年4月24日、金曜日の朝

(――)きのうの朝はほんとうに嬉しいでした。モノーから短い便りがあって、ムネ＝シュリーに¹⁾ [『オルシーノ』の] 写しを届けたところ、それを丁寧に読んで率直な感想を述べることを約束してくれた、というのです。モノーは付言しています、「彼はたいへんな劇的才能と強烈な生の感情がそこに潜んでいるのを見るにちがいません。これを上演可能と考えるかどうかは分かりません。」――さらにモノーは私見を述べていますが、あなたは英国ではなくフランスで執筆するか、それともまた出版するほうが得策です²⁾ 「名前が賣れるためにはです。彼〔ロラン〕の才能をもってすれば、それは容易なことでしょう。英国では名前の賣れた人間だけが求められます。」モノーのいうとおりかも知れません。そして本来これが自然な道です――翻訳は避けるべきですから。翻訳となると言葉の特異性が若干は失われるのが常です。ともかくこれで道は開けました。あとはただ創造し、あなたの道に行くことだけが問題です。そこにもさまざまの幻滅と困難があなたを待ち受けていることを、私は隠そうとは思いません。この点で自分を欺くには、私はあまりにも多くのことを経験しました。しかしたとえそれが天才にとって「十字架の道」(Via crucis)であるにしても、それはまた、天才が自分を卑めることのない唯一つの道であり、そして神的な歓喜の瞬間を味わう唯一つの道なのです。そして

他日あなたの名前がフランスの偉人たちの名前にまじって呼ばれるとき、あなたは、あなたの使命の目ざめを歓迎し、あなたの守護^{フーリス}霊の権利を擁護した一人の女友だちのことを思い起こすでしょう。(―――)

ご機嫌よう、したいい友。窓ガラスを入れなければなりません³⁾。人が呼んでいます。用事また用事です。「はてしなき多忙の虚しさ！」

注

- 1) 『ユニテ』7, P.27の注3)参照。
- 2) 当時マルヴィーダはロランの作品が英国の新聞や雑誌に発表されるよう努力していた。
- 3) ローマは地震による被害を受けた。

V マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年5月7日

(―――) したいい友、確信をお持ちなさい。私はあなたの悲しい気分がわかります。これは今あなたが身をもって味わい、そして魂が「もし得べくは、この酒杯^{コップ}を我より過ぎ去らせ給え！」と唱える、カンラン山での瞬間なのです¹⁾。しかし通り抜けなければなりません。あなたの道には、他の人びとの道より多くの苦難と失望が待ち受けていることを、私は少しも隠そうとは思いません。もしあなたが別の人間なら、私はあなたに言うでしょう、「大勢の人がゆく広い路をえらびなさい」と。しかしあなたはあなたなのですから、私は言うのです——「少数の人がゆく、石だらけで骨の折れる、しかしそれだけが高みへと導く狭い道をとりなさい。」

私があなたに悪い助言をしていると非難されることは間違いありません。これが世の常です。いつも誰か悪者が一人いなければなりません。しかし私たちが服従するのは内面の声であることを付度する者は誰もいないのです。私自身はこんなこと

を気にはしません。悪者にされても構いません。あなたにとってこの私以上に私心なく献身する人間がいないこと、そして今後もいないだろうことを私は知っています。私が十分な自信をもって行動できるのはこのためです。

(一) 明日、7時に待っています。お会いできるのがこの上なく楽しみです。

M.

注

1) マタイ福音書 26 章 36 以下参照。

Ⅶ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891 年 5 月 21 日、木曜日の朝

したい友、ミンゲッティ¹⁾の家でバリョーニ一族の歴史を読みなおして来たところです。私にはそう思えるのですが、アストレには彼の勇敢さのほかに、ひじょうに高貴で、上品で、芸術的に洗練された性格を付与できないでしょうか——たとえばウルビーノを支配したあのモンテフェルト一族にみるような。そうすると彼は——婚礼の宴(この場面はともかく舞台でみせるのでしょうか?)では才気と優雅さで際立つことにより——あの年若い粗野なシモネットとは見事な対照をなすことになり、むしろ、グリフォネットとぴったり合致するでしょう。グリフォネットもやはり洗練されており、アタランタの手で大切に養育されました。そしてこのことが彼の裏切りをいっそう嫌悪すべきものにし、裏切りの決意に先立つ葛藤をいっそう悲劇的なものにします。それからフィリップ——シェイクスピアのイヤーゴを思わせる人物——の仕業をいっそう前面に出すためには、グリフォネットとその妻——「楽園のこれら二体の天使」——の間にくり広げられる感動的な場面がなくてはなりません。ジャンバオロ——これはアストレやグリフォネットほど洗練されておらず、またシモネットほど粗野でも勇敢でもなくて、物静かではあるが毅然とし

た行為の人間です。グリフォネットにたいする彼の誇り高い軽蔑は堂々としています。

いや、したい友、この素材は捨てるには美しすぎます。これは『オルシーノ』のシェイクスピア的続編です。これには更に——極楽の歌のように——オルフェウスの＝ギリシア的な戯曲がつづくでしょう。ああ、なぜ時間を逆行させることが出来ないのでしょうか！今がまさに一月でなければならぬのです！そして四ないし五ヶ月が私たちの前に跡切れることなく一続きとなって横たわってしてくれるなら——。そうならば一切は平穩のうちに仕上がるでしょうに！私のしたい友、また狼に出会うことなどありませんように！²⁾私は今晚、退屈という狼に出合わねばなりません。この五ヶ月というもの、私は晩に外出したことがありません。しかしいつも狼のほうからやって来ました。私はあなたと一緒にいるほうが——私のところのあなたの一隅にいるほうが、ずっとずっと嬉しいのです。

注

- 1) 『ユニテ』2, P 7の注1) 参照
- 2) ロランはローマ郊外を散策の折、狼に出合った。

VII ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1891年5月30日

(一) あなたは私が私自身を最悪の敵にしている、と言って非難されます。そのとおりです。私は他人を軽蔑するのと殆ど同じくらい私自身を軽蔑します。私の自尊心は私自身にたいして怒り狂います。なぜとって、私は悩んではならず、また悩もうともしないのに、それでもなお悩むからです。あなたは私の自尊心をご存知ありません。この自尊心をもってしても勝利することに成功しなかったのは、私にも説明できません。しかし痛烈な打撃はあまりにも深いものでした。私は自分の愛に悩むばかりでなく、私の生の本来の泉である愛自体にも悩んでいます——私

の存在のすみずみまで。このような状態にある私は、助けになる手段はないばかりか、また、あるはずもない、と言うのです。私の自尊心と私の心情は、どちらが私をもっとも悩ませるかをめぐって相争うのです。

ドリュフォロス！¹⁾ かつて生がこの栄光に輝く闘技者のように純粹、崇高、全能であったというのは、実際ありうることでしょうか？ ああ、このことが他のことにもまして私を苦しめるのです。

新しい素材が私の魂のなかで生氣をおびて来ました。ギリシア劇への素材で、悲しく、穏かで、とても偉大なものです。それはデーメーテルとペルセフォネーの神話²⁾です。たとえ形式はギリシア的であるにせよ、この素材には一切を包容する深さがあるが故に、そして、ことばの才知ゆたかな遊戯ではなく、人類の心の底から発する間断のない感動であるが故に、私はこの素材をとくに愛します。そしてこの素材には一種、憂いを含んだ晴朗さがあり、私にはあの楽園的な晴朗さ——それは私にとって心的な理想、芸術的な理想であるのですが、その晴朗さよりもよく理解できます。

この新しい仕事にとりかかる、とは決して申しません。しかしこの仕事は一つの芸術家の夢であって、それは私の孤独の上に漂い、この孤独の中にわずかの光をもたらしてくれます。

私の芸術家としての魂がまったく議論の外にあることを信じて下さるよう切望します。この魂は、いつでも、言わなければならぬことを言うでしょう。そしてあなたはこの魂のことで不安がってはなりません——たとえ興奮と苦悩が私の心をさいなんでも。私の芸術は私には不安を与えません。私が生きているなら、私の芸術もまた生きるでしょう。私の芸術がよいか悪いか——これを判断するのは他の人びとのやることです。しかし私が生きるなら、私の芸術は生きるでしょう。——私の芸術は問題ではありません。唯一の問題は、私が幸福になるだろうか、それとも不幸になるだろうかです——私が、私の生が、私の個性的な魂がです。あなたは私がひじょうに移ろいやすいもの、けっきょく私だけに係わるものに、あまりにも多くの意味を付与するとお考えかも知れません。私もそうです。しかし生のエゴイズムはまったく強靱な根をもっています。

心をこめて抱擁します。

あなたの友、R. ロラン

注

- 1) ドリュフォロスはギリシア語で「槍をもつ男」の意。前5世紀ポリュクレイトスの作で、ギリシア彫刻を代表する一つ。
- 2) 農耕の女神デーメテルの娘ペルセフォネー（ローマ神話ではプロセルピナ）は冥府の王ハーデースにさらわれて后となった。女らしさの一つの典型として古来多くの詩人が扱っている。

VIII マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年5月31日

お手紙を受け取ったところです。これで私の悲しみは十二分になりました。これがまさに最後の打撃です。この3日間というもの、私は次から次へと傷を負いました。この数週間のうちに世を去ることのできた人びとがうらやましい位です。それでも、美しい日の出のあのギリシア的な清朗さのうちにではなく、生の苦澁を味わいながら世を去るのは悲しいことです。

（―――）昨年よりも前進できなかったばかりか、むしろ後退させましたので、私はあなたのために尽くすことでの私の完全な無力を悟りました。そうです、あなたがもう一度私のところへ来ることは望めません。これから先ここでは何の変化もないことでしょう。ただ時がたつにつれ、あなたが遠ざかるにつれて、それなりの変化があるかも知れません。それでは当地を去って二度と戻らないで下さい。この数週間ははやもやに包まれており、苦痛に満ちています——おだやかなメランコリーにではなく。ええ、私はあなたがもっと強い人間だと思っていたのです。

（―――）さて、私もこの最後の悲しみを克服して、永遠の思想が住まう国に

身をかくさねばなりません。この国からの橋は彼岸に通じるだけです。私はもうこの国から出てはならなかったのです。ああ、今日ミンゲッティ夫人は、他人のための苦しみということでは、そしてまた個性にかんする権利ということでは、私をほとんど理解してくれませんでした。

あなたの芸術については、私の信念はゆるきません。私はあなた以上にあなたの芸術を信じます。しかしここでこそ——ひとたび仕事が始まれば——ドリュフォロスが問題になるのです。それは理想に形姿を付与するための苦闘であり、そこでは他のすべて——魂の悲しみさえも、忘れ去られるのです。私が生きている限り、私はイタリアでの第2年目がほかに何の成果も生まなかったことを残念に思うでしょう。しかし私はどこか別の場所、別の環境、そして、人間を助けて彼が本来なるべきものにならせるすべての力があなたに味方してくれること、そして強大なローマと微力の私がいし遂げなかったものを成就してくれることを切望します。

あなたの女友たち

Ⅸ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

1891年6月1日

手紙を書くや否や、私はもう後悔します。あなたにたいする私の友情と信頼、愛にたいする私の欲求——こういったものが私に卑怯な言動をさせました。自分の悲しみを自分だけのものにしておく代りに、そのことであなたを悲しませる結果になりました。お許し下さい。もし自分の悩みに耐えるだけの十分な強さがあれば、他人の助けは要らないことはよく分かっていました。そしてもしそれだけの強さがないなら、誰がその力を与えてくれるでしょう。こんな次第で私はあなたにただ悲しみだけを与えてしまいました——喜びの代りに悲しみを。私の心の苦しみにたいしてあなたが私以上に無力であることは、お手紙がよく示しています。結果としてあなたは私の心の苦しみを増すばかりです。私はこれを自分だけのものにしておく

べきでした。私の外的な態度、行為、仕事は余儀なく他人の判断にさらされても、私の感情はそうではないことを考えれば、なおさらです。私の感情はただ私だけに保っています。自分の内なる世界を完全に理解できるのは自分だけです。したがって他人にのぞき込ませるのは、むしろマイナスです。

しかしこの「件」について申し上げておくことがあります。あなたの心痛と、私に向かつてあなたの「完全な無力」云々を口にされるその執拗さをみると、私はあなたが次のようなことを思い込んでおられるのではないかと不安になるのです——つまり、心からの共感と深い愛情（私はそれを必要とします）以外のものを私があるあなたにお願いしている、と思込まれることです。あなたにさし上げた最初の手紙いらい、私が何かほかのものをお願いしたことは決してありません。私が嘆くのは不可能なものについてだけです。可能なものが私の前にある限り、私は嘆かないでしょう。それは戦いへの契機になることでしょう。そして戦う場合には、私は勝つことができます。

さいごに一言。いつの日にか理想が私をして心の——私の心の喜びと悲しみを忘れさせるようなことがあれば、その時には私は軽蔑をこめて芸術を投げ捨て、それをフロベールのつまらぬ模倣者たちに委ねるでしょう。もし芸術が私たちの肉——苦痛と情念を宿す肉のなかに根差していないのなら、もし芸術が私たちの悩みと喜びから咲き出る花でないのなら、芸術は私となんの関係があるのでしょうか。

ああ、いつも冷静に、客観的になろうとして無理をされるのはよくありません。それはあなたには成功しません。あなたは感情がゆたかすぎます。あなたのように親切で、同情ぶかく、せん細な人は、「永遠の思想が住まう国に身をかくすこと」を口にしても無駄です。また、愛し悩む者にそれを勧めても無駄です。それを自分で実行することも、他人に説得することも成功しはしません。それでますますよいのです。死が近づけば、永遠の思想はおのずから私たちを捕えることでしょう。しかし当分は生きることにしましょう——光を見ている間は。

こんなふうに私があなたよりはるかに異教的な考え方をするのを許して下さい。私は心からあなたを愛しています。

そしてこれ以上むなしく嘆くことは止めましょう。私はこれ以上この問題につい

て書かないように努力します。私が悲しんでいるのをご覧になった場合、その理由をご存知であれば十分です。またそのことで——私にたいし少々不満になりかかったりされずに——私をいっそう愛して下されば十分です。これが私のお願いするすべてです。そしてこのことを私が「忘れること」ができないのを許して下さい。

あなたの誠実な友

R. ロラン

X マルヴィーダからロランへ

ローマにて

1891年6月2日、火曜日

奇妙なことです。したい友——私たちはちょうど1年前のいま頃に同じ問題について、ほとんど同じ議論をしたのです！ 今回は私のほうが議論をひき起したのではないことは確かです。しかしくり返言っておきますが、あなたが私にこんなふうを書いて寄こしたのは良いことです。その理由を言いましょう。なるほどあなたが私にたいし何かを願ったことは決してありません。私の友情を願ったことも一度もありません。それは進んであなたのものになったのです——すべての真の感情がそうであるように。しかしご存知のとおり私の友情の本質には、愛する者たちの悩みを共にすること、そしてそれを柔げるために、或は、彼らの心の苦しみの釣合いとして何らかの喜びを与えるために、最善をつくすことが含まれているのです。あなたが——あなたの悲しみの重荷で——打ちひしがれているのを見たとき、私はその悲しみを柔げる手立てをあれこれと考えました。それというのも、その悲しみのために、あなたの中に息づいていきりに形態を求めるもの、そしてあなたの将来がそれに係っているものを実現する力が失われてゆくのに気づいたからです。私の知っている悩みには、さらに他のさまざまな不安がつけ加わるでしょう。あなたの理想と現実が両立せぬことからいって、それらの不安は当然です。そこで、あなたのために平安の場をつくれることを期待しつつあなたを深い愛情で包む一方、私

はこれらの不安をどうすればいちばん上手に、いちばん効果的に解消できるだろうかと考えました。そしてひそかに、あなたに(もしそれが成功するなら!)快い不意打ちをする仕事を進めたのです——無邪気な喜びに浸りながら。そして私がいろいろの方面から辛い失望を味わって、私の心が——こんな経験には慣れていているもの——悲しみで一ぱいだったちょうどその頃、日曜日の朝に、もっと大きい失望が一つつけ加わりました。モノーの率直な心痛を伝える手紙がヴェルサイユから届いたのです。それによると『ルヴュー ブルー』[青い評論]誌が『モーツアルト論』を送り帰して来たそうです。私はひじょうな悲しみを味わったため、日曜日にこのことをあなたに言うだけの勇気がなく、ただ、モノーが即刻やってくれた別の試みの結果を待つことにしました。しかし今はこのことをあなたに言って、あなたの手紙——想像以上にあなたの悩みがひどいことを分かせてくれた例の手紙がなぜ私の悲しみを極限にまで高めざるをえなかったか、そしてあなたの悩みを柔げるには完全に無力だというあの辛い言葉をなぜ私に吐かせたかを納得してもらいます。あなたはこの言葉を誤解したのです。あれは、もっとも熱烈な友情でも或る場合には無力であることを悟った悲嘆の叫びだったのです。

あなたが芸術について言われること——つまり、芸術は私たちの悩みと喜びから咲き出る花だというのは、まさしく私がつね日ごろ言っていることです。そして芸術が花であり、まさにその故に唯一つ真実の、最高の慰めであるからこそ私はそれを願い、それを呼び起こそうとするのです。そのためにあなたが2ヶ月前には靈感に支配されているのを見て私は仕合わせでしたし、今は、慰めをもたらすこの花をいっばいに咲かせる力があなたにないのに気づいて悲しくなったのです。

私たち二人のどちらがより異教的な考え方をしているかという問題については、もしお望みならあなたの優位を認めます。もともと異教的な晴朗さ——青い空、生の甘美さを受するからこそ、私はこれを自分と同様に私の友人たちにも願うのです。彼らのために、そして自分のためにドリュフォロスであることが成功すればと思います。私もまた闘士であったのです。ただ残念なことに——現世の人間の常として——間断のない闘争で傷だらけになりました。ポリュクレイトスのドリュフォロスはそうではありません。これは至高の芸術の業です。花であり、勝利の

栄冠であるのです。

そしてこの栄冠を私はあなたのために獲得したいのです。それは心情の悩みを否定することによってではなく、それをば神的な創造力に変えることによってです。

(一)まだ言うことはたくさんあるのですが、用事でペンを置きました。もう夕方ですので、私の[弱い]眼のためには、これ以上書くわけにゆきません。ただ繰り返しておきますが、あなたの心の悩みの底の底まで私に話して下さったのは良かったのです。たとえ私に何もできなくても、私はその悩みを尊重するでしょうし、今後それをかき立てたりはしません。さいごにもう一言——私の友情は不動です。そしてこの友情が揺らぐことがあれば、悪いのはあなたではなく、友情そのものの無力さです。

愛情をこめて、心からあなたの

M.

南大路 振 一訳



マルヴィーダ(レーンパッハ画)

ユニテの広場

届く声

西村 太一

国家主義的立場に拠るフランスの批評家アンリ・マシスは、1914年の大戦に際してロマン・ロランの示した態度に憤り、ロラン弾劾の小冊子『フランスに反対するロマン・ロラン』を刊行した。時代を思えば、この種の本が大手を振って流布されていったことは想像するに難くないが、動員令発布以来、貨物輸送班に配属され軍務に忙殺される日々を送っていたロジェ・マルタン・デュ・ガールも、発刊一年後という遅ればせではありながら、この小冊子を手にする事となった。

前線で人間の獣性を前にして、神なき世界における^{モラル}道徳の問題に苦悩していた、のちに『チボー一家の人びと』の作者となる若きマルタン・デュ・ガールは、ロラン糾弾を目的とするこの小冊子のなかから、著者マシスにとっては皮肉な結果にも、狂奔する時代に真向から対立する正義の声を聞きつけた。

ただちに彼はその歎びをロランに伝えた。

……ああ、ついに、ついに、呼吸しうるなんという一陣の空気！それによって私は一変し、若がえり、かつてなかったほど未来を生きることを渴望しているのです！……

求められていた声^{いさ}が、前線の一青年に届き、人間の愚行を前にして絶望する彼に一筋の光明を与えた。そしてこの光明は、のちに『チボー一家の人びと』において、「1914年夏」のジャック・チボー、「エピソード」のアントワヌ・チボーを導くものとなるのである。

友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会例会は、現在までに通算 250 回をかぞえています。その活動状況は下記のとおりです。

1979 年 4 月 28 日（土）

246 回例会

第 71 回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： ロマン・ロランと戦争

「戦いを超えて」

発表者 寺田 由美子

出席者 16 名

日頃、知識人と呼ばれている人たちが、戦争にのぞんでどう対応するか、第二次大戦の時、日本の知識人は何故断固として戦争に反対しなかったのか、さまざまな問題が提起され、活発な意見が交わされた。肉体や心情は祖国に与えても、精神は与えない、とロランが狂気のナショナリズムを批判した自由な立場をこそ学ばねばならない、と強く感じさせられる。

5 月 26 日（土）

247 回例会

第 72 回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： ロマン・ロランと戦争

「偶像」

発表者 椿 充代

出席者 11 名

時ならぬ雷雨のため出席者が少なかったが、発表者のよく整理

され準備された報告をきき、ロランのいう偶像の意味がよく理解できた。相手の中に自分を見出し共通の悩みをみつけ出してゆくこと、それが偶像を打ち砕いてゆく力である。いかなる偶像も一人類というそれさえも——好まなかったロランの純粹な知性に学び、私たちは絶えず偶像を打ち砕いてゆかねばならないと痛感させられる。

6月23日(土)

248 回例会

第73回 ロマン・ロランセミナー

テーマ： ロマン・ロランと戦争 Ⅱ

『先駆者たち』

「日本の青年たちにおくるメッセージ」

発表者 波多野 茂 弥

出席者 20名

未来の自由、そして人類の進歩と平和のために戦った先駆者の戦いの実例を述べることで、いつ果てるともない戦争の中で口を塞がれ、希望を失っている人々に慰藉と励ましを与えようとしたロランの真情が吐露されている。エリートから無名の人々へとロランの心の支えが変ってゆく過程がよくわかる。日本で最初に『先駆者たち』を翻訳したのは故大佛次郎氏であると同い、そのことにも感銘を受けた。新しい若い人たちの参加が多数あり、夏休み前の充実したセミナーとなった。

9月29日(土)

249 回例会

第74回 ロマン・ロランセミナー

場 所 京都府立文化芸術会館

(宮本先生御病気のため、当分の間会場を外に移すこととなった)

テーマ： 『先駆者たち』より

「平和の祭壇に」

発表者 小田 秀子

出席者 14名

財団法人ロマン・ロラン研究所が設立されて以来、ずっと通り親しんだ研究所の和室から一変して、洋風の小会議室。このセミナーも新しい段階にさしかかったと言えよう。しかしロランへの道程はまだまだ遠くに続くようだ。小田さんの真摯な発表のあと、波多野先生がていねいな解説をして下さった。散文詩という形に理解を妨げられていたものが、ようやくロランを見つけた満足感にセミナーの有難味をかみしめた。

10月27日(土)

250 回例会

第75回 ロマン・ロランセミナー

場 所 京都府立文化芸術会館

テーマ： 「登り行くつづら折りの道」

発表者 寺尾 文成

出席者 15名

この論文には現実直視、人間に対する深い信頼を基調として、真理を、一如を見出そうとするロランのひたむきな姿勢が感じられる、と発表者が述べられたあと、波多野・南大路両先生から懇切なご解説があり、難解なこれら論文にも一歩近づき得た感がある。『戦いを超えて』に耳を傾けようとしないう人々に語ることの無益を知り沈黙していたロランが、再び言わずにいられなかったヨーロッパの悲惨な深淵、65年後の今日の世界の現状にとって、このロランの発言の持つ意義の大きさを改めて思う。

あ　と　が　き

ユニテ（第3期）は、この号をもって10号となる。ロラン全集の方も、第3次の刊行がよいよスタートした。

かえりみると、ロランの本格的な紹介は、戦後の荒廃のさなかに始められ、今年には30年となる。その間、一部の著作（二長編小説・評伝など）は、数多い全集・文庫本に編入され、ロランの名は、一般に広く知れわたった。しかし、その結果できあがった一般のロラン像は、戦前の、人道主義の、英雄伝の、反戦論者として紹介されたロラン像と大きくは変わっていないのではないか。たとえば『コラ・ブルニョン』は、二つの長編小説・評伝あるいは『戦いを超えて』にくらべほとんど関心をもたれてはいない。これはロランらしくないという若い声さえある。このことは、読者としての年齢のせいにして片づけてしまうことはできない問題をも含んでいるように思う。あたかも、私たちの住むこの地球には、真昼の太陽に照し出された国々のほかに、夜の世界があり、朝と夕の土地があるように、ロランの生涯の仕事も、広大にして深遠、しかも多様な相を持つているのだから。それにしても、私たちの社会の現況を考へてみると、ロランのもう一つの、一般に知られていない、その世界こそが、いま、緊急に知られる必要があるのではないだろうか。

今回の新しいロラン全集の充実と典雅を心から嬉しく思う。しかし、同時に、読者のひとりとして、だれでもが、もとめているものを、いつまでも、どこでも入手できるような配慮をひたすら願いつづけるものである。

さて、今回は、『魅せられたる魂』にちなんだものによって、ミニ特集を試みた。山口三夫先生から、重要な問題提起と先生の真情吐露を含む序論をいただいて、はじめて当初の目的に近いものができたように思う。山口先生は、南大路先生、相浦（杲）先生とともに、本紙への、数少ないあたたかい支援者である。編集者としてはもちろんのこと、読者としても、多くの方々に代って感謝の気持ちをあらわしたい。

《再読して》の垣内永至さんは、三菱電機の技師として、革命前のイラン、韓国、

ヴェネゼラ等多くの国々へ派遣された経験をもち、現在も仕事は多忙(殺人的?)をきわめているときく。熱烈なロラン愛好者というのではなく、冷静な読者として、4分の1世紀ぶりに再読し、どういう受けとめ方をされたか?一つの読み方として意味深いものがあると思う。《生き方》の中村さんについては、すでに本誌6号で紹介を行った。文章はかつてセミナーで発表されたものであるが、セミナーへ不参加の方にも、その水準と真摯さが、ご理解いただけるのではないか。《広場》の西村太一さんは、大阪市大の大学院で現在フランス文学を専門に研究中であるが、あわせて、最近、研究所と友の会の雑務をほとんど一手にお世話くださっている方でもある。

(編集部 織田和夫)

投 稿 歓 迎

- ロマン・ロランの友の会の会員であれば、誰でも自由に投稿できます。現在のところ枚数の制限はしておりませんので、何枚書いて下さっても結構です。ただし、掲載の都合で何回かに分けたり、適当に削ったりすることがありますので、ご承知ください。
- 原稿は必ず、400字詰、または200字詰の原稿用紙に横書きにして、ロマン・ロラン研究所あてにお送り下さい。
- 締切り日は特にもうけてはおりません。年2回発行を原則としておりますので、随時、お送り下さい。
- 原稿を掲載した方には、原稿料に代えて、当該「ユニテ」を3部贈呈いたします。

「ユニテ」 編 集 部

ユニテ 第3期 第10号

発行日 1979年10月31日
発行所 財団法人 ロマン・ロラン研究所
京都市左京区銀閣寺前町32
TEL (075) 771 - 3281
印刷所 昭和堂印刷所
京都市左京区百万辺交差点

- /RR/1/98/ Rolland, Romain: Jean-Christophe de Romain Rolland. -raconté aux enfants par Mme Hélier-Malaurie.- (éd. Albin Michel, Paris, 1932)
- /RR/1/99/ Rolland, Romain: Pages Choiesies. (Librairie Hachette, Paris, 1955)
- /RR/1/100/ Rolland, Romain / Lugné-Boe: Correspondance 1894-1901. (L'Arche, Paris, 1957)
- /RR/1/101/ Rolland, Romain: Pages Choiesies I. -Avec une introduction et des notices par Marcel Martinet, et un portrait d'après Granie. (Ollendorff, Paris)
- /RR/1/102/ Rolland, Romain: Pages Choiesies II. Avec une introduction et des notices par Marcel Martinet. (Ollendorff, Paris)
- /RR/1/103/ Rolland, Romain: Johann Christof. (Literarische Unstalt Rütten und Loening, Frankfurt A.M., 1922)
- /RR/1/104/ Rolland, Romain: Johann Christof. (Literarische Unstalt Rütten und Loening, Frankfurt A.M., 1922)
- RR/1/105/ Rolland, Romain: Johann Christof. Rinder und Tugendjahre. (Literarische Unstalt Rütten und Loening, Frankfurt A.M., 1922)
- /RR/1/106/ Rolland, Romain: John Christopher. -Dawn and Morning- I. (William Heinemann, London, 1921)
- /RR/1/107/ Rolland, Romain: John Christopher. -Storm and Stress- II. (William Heinemann Ltd., London, 1924)
- /RR/1/108/ Rolland, Romain: John Christopher. -In Paris- III. (William Heinemann, London, 1921)
- /RR/1/109/ Rolland, Romain: John Christopher. -Journey's End- IV. (William Heinemann, London, 1924)
- /RR/1/110/ POLISH POLIAN: KOAA BPFONCOH. (MOCKBA, 1952)
- /RR/1/111/ Rolland, Romain: Lothar and Son, Being Volume three of The Soul Enchanted. (Butterworth, London)
- /RR/1/112/ Rolland, Romain: Michelangelo. (Duffield and Company, New York, 1921)
- /RR/1/113/ Rolland, Romain: Das Leben Tolstojs. (Frankfurt Am Main, 1921)
- /RR/1/114/ Rolland, Romain: Das Leben Michelangelos. (Frankfurt A. M., 1921)
- /RR/1/115/ Rolland, Romain: Mahatma Gandhi. (The Swarthmore Press Ltd., London, 1924)
- /RR/1/116/ Rolland, Romain: The People's Theater, -translated from the French of Romain Rolland- (Henry Holt and Company, New York, 1918)
- /RR/1/117/ Rolland, Romain: Above the Battle. -Translated by C. K. Ogden, M. A. (George Allen and Unwin Ltd., London)
- /RR/1/118/ Rolland, Romain: Goethe and Beethoven. -Translated from the French by C. A. Pfeister and E. S. Kenn (Harper and Brother Publishers, New York and London, 1931)
- /RR/1/119/ Rolland, Romain: Prophets of the New India. -Translated by E.F. Malcolm-Smith (Cassell and Company Ltd., London, 1930)
- /RR/1/120/ Rolland, Romain / Meysenbur, Malwida Von: Ein Briefwechsel 1890-1891. (J. Engelhorn's Buchf., Stuttgart)

- /RR/1/121-1/ Rolland, Romain: The Revolt of the Machines or Invention Run Wild. (The Dutton Press, New York, 1932)
- /RR/1/121-2/ Rolland, Romain: Clerambault, -the story of an independent spirit during the war. - Translated by Katherine Miller (Henry Holt and Company, New York, 1921)
- /RR/1/122/ Garbhe: La Jeune Inde. -Introduction de Romain Rolland.- (Librairie Stock, Paris, 1925)
- /RR/1/123/ Rolland, Romain: Jean-Christophe. Tome 2. (Albin Michel, Paris, 1931) -Livres de Poche-
- /RR/1/124/ Rolland, Romain: Jean-Christophe. Tome 1. (Albin Michel, Paris, 1931) -Livres de Poche-
- /RR/1/125/ Rolland, Romain: Jean-Christophe. Tome 3. (Albin Michel, Paris, 1931) -Livres de Poche-
- /RR/1/126/ Rolland, Romain: Jean-Christophe. (Extraits I.) (Classiques Larousse, 1954)
- /RR/1/127/ Rolland, Romain: Das Leben Michelangelo. (Rütten und Loening, Berlin, 1969)
- /RR/1/128/ Rolland, Romain: Musiker Von Heute. (Rütten und Loening, Berlin, 1972)
- /RR/1/129/ Rolland, Romain: Das Leben Tolstois. (Rütten und Loening, Berlin, 1967)
- /RR/1/130/ Rolland, Romain: Pierre und Luce. (Rütten und Loening, Berlin, 1969)
- /RR/1/131/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Первый.- Драммы Революции. Вальми. (Художественной Литературы, Москва, 1954)
- /RR/1/132/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Второй.- Жизни Великих Людей. (Художественной Литературы, Москва, 1954)
- /RR/1/133/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Третий.- Жан-Кристоф. Книжки первая и вторая и время (Худо. Литера., Москва, 1955)
- /RR/1/134/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Четвертый.- Жан-Кристоф. Книжки четвертая и пятая. (Художественной Литературы, Москва, 1956)
- /RR/1/135/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Пятый. Жан-Кристоф: Книжки шестая, седьмая, восьмая. (Ху. Литера., Москва, 1956)
- /RR/1/136/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Шестой.- Жан-Кристоф: Книжки девятая и десятая. (Ху. Литера., Москва, 1956)
- /RR/1/137/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Седьмой.- Кола Брюньон, Дилули, Пьер и Люс. (Ху. Литера., Москва, 1956)
- /RR/1/138/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Двенадцатый.- Бетховен, великие творческие эпохи, незавершенный сбор. (Ху. Литера., Москва, 1957)
- /RR/1/139/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Тринадцатый.- Публицистика (1917-1939). (Худо. Литера., Москва, 1958)
- /RR/1/140/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Четырнадцатый.- Вопросы Эстетики. Театр. Живопись. Литература (Ху. Литера., Москва 1958)
- /RR/1/141/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Восьмой.- Очарованная Душа, Книжки первая и вторая (Худо. Литера., Москва, 1956)
- /RR/1/142/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Девятый.- Очарованная Душа, Книга третья (Худо. Литера., Москва, 1956)
- /RR/1/143/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Десятый.- Очарованная Душа, Книга четвертая. Том первый. Смерть Сююмбисы. (Худо. Литера., Москва, 1956)
- /RR/1/144/ Роллан, Ромен: Собрание Сочинений. Том Одиннадцатый.- Очарованная Душа, Книга четвертая. Том второй. Годы (Х.Л. Москва 1957)
- /RR/1/145/ Adams, Jane, etc.: Liber Amicorum Romain Rolland. (Rotemel-Verlag, Zürich und Leipzig, 1956)

終焉の家

饗庭孝男

町は丘にそって道の両側にあり、麓は緑の木立につつまれている。夏ならば花ざかりになるだろうナデシコ、つりうき草やゼラニウムが家の庭や垣根にあり、薔薇の蔓がそこにからんでいる。ほとんど古い家々ばかりだ。今は使われなくなった井戸、ふぞろいな窓のある、蔓のおいしげった家、張り出した石づくりの古い窓など、見ただけでも年代を感じさせる。のぼってゆく途中にロマン・ロランの終焉の家がある。戸は閉まっている。つつましやかなこの家で、彼は晩年をすごしたのであった。彼は若き日、友のシャルル・ベギーのすすめで『半日手帖』にあの『ジャン・クリストフ』を書いて世に出た。その友ベギーは第一次世界大戦で戦死したが、その後30年ちかくロランは生き、78歳で、このヴェズレーで亡くなっている。彼の最後の著作は、その友、ベギーの思い出を書いた大作『ベギー』であった。その晩年の日々はフランスがドイツに占領されていたころであった。フランスが暗い希望のない日々も、かわることなくこのヴェズレーに春は来て、野には花が咲きみだれたであろう。ベギーのもっとも愛した言葉は、神学の徳の一つ「希望」であった。ところでロランの大作『ベギー』の最後にはベートーヴェンの『フィデリオ』における「希望」が書かれている。その『希望』は、はるか遠く、亡くなったベギーの「希望」と響き合ってロランの晩年を支え、フランス占領の暗い日々を支えたのであった。私は坂をのぼりながら、その道に年老いたロランの姿を幻のように見た。彼は家から出て幾度となくこの道をのぼり、聖マドレーヌ教会へ足をはこんだことであろう。彼の心に、若き日のベギーとの交遊の思い出がよみがえり、思わずしらす微笑をうかべたにちがいない。狭い道の上にロランの足音がきこえてくる……。